

国語科教科書に描かれた「奈良」

—— 郷土教材開発試論 ——

米田 猛

一 本稿の目的

世に存在する国語科教科書を全部調べたわけではないが、「奈良」ほど、国語科教科書の題材に取り上げられている土地も珍しいであろう。ちなみに、「東京」「大阪」等の大都市名、「京都」「鎌倉」等の歴史的な地名などをキーワードに国語科教科書の教材名検索を試みると、上位に入るのは「東京」「奈良」「京都」「北海道」等となる^①。もつともこの結果は、単純に、教材名にその地名を含むという大雑把な検索であり、教材名に地名を含んでも「東京のことば」というような教材は、直接、その土地の風景や建造物に触れたものではない。また、「法隆寺」のように地名を含んでいなくても、その土地について描いたものもあるので、あくまでも参考程度ということになる。

筆者は、別の必要があつて、戦後中学校国語科教科書掲載の教

材を国立教育研究所附属教育図書館・(財)教科書編集センター共編(一九八六)『中学校国語教科書内容索引』で検索しているうちに、奈良に関する教材が多いことに気付き、他の検索手段も活用して、表1のような結果を得た。特に、『中学校国語教科書内容索引』を用いた手作業による検索は、パソコンによるキーワード検索とは異なり、「奈良」という地名が教材名に含まれる場合はもちろん、「奈良」という地名が教材名になくとも、奈良に関する内容であることを判断できる場合があるので、いずれの場合も該当教科書の原文でその内容を確認している。なお、『中学校国語教科書内容索引』は、その収録対象が昭和二十四年～昭和六十一年度発行の中学校国語科教科書に限られるので、昭和六十二年以降発行の中学校国語科教科書については、別の検索方法を活用して^②調査を行っている。なお、この調査ではまだ見落とした教材も存在することと思われるので、その補遺については今後の課題とした

い。本稿では、表1に示した戦後中学校国語科教科書における「奈

良」に関する教材(のべ五十一編、異なり教材数三十一編)を分析し、郷土教材の在り方について考究するとともに、「読むこと」教材として可能性のある新たな資料や指導の実際を、筆者の実践も踏まえながら提案することとする。

二 「郷土教材」という用語

特定の地域や土地を扱った国語科教材の名称について、何か定まったものがあるわけではない。国語科教材を分類して呼称するときには言い習わされている「○○教材」という言い方でもし呼称するとしたら「ふるさと教材」「郷土教材」「地域教材」あたりが考えられるところである。本稿では、以下に述べる理由で、「郷土教材」と呼称することとする。

まず、「ふるさと教材」と「郷土教材」とを比較する。

「ふるさと」と「郷土」との使い分けや語感を、中村明(二〇一〇)『日本語 語感の辞典』(岩波書店)で確かめてみよう。

「ふるさと」について、中村は「出身地」はもちろん、『郷里』よりも、情のこもった表現。生まれ故郷から長く遠く離れている人が、昔を思い出して懐かしむ気持ちが強くと、『故郷』の和風版に相当する。(九三五ページ)と述べる。

一方「郷土」については、『郷里』『故郷』『ふるさと』などが個人の視点でとらえているのに対し、一般的な視点に立つてそこ

に住む人びとにとつての土地を考えた感じの語で、個人の思いのこもらない客観的で比較的スケールの大きな雰囲気がある。(二六七～二六八ページ)と述べる。

これによれば、「ふるさと」は、そこから「長く遠く離れている」主体が、情感を込めて「懐かしむ気持ち」を強く感じさせるために「郷土」よりは狭い範囲を指す場合もあると推測されるのに対し、「郷土」は「そこに住む」主体が、「ふるさと」よりは客観的にその土地のことを思い、そのため、「ふるさと」よりは広い範囲を指すものとして推測される。

すなわち「ふるさと」と「郷土」とを比較したとき、「ふるさと」には、範囲として「より個人的で狭い範囲」であり、感情として「個人的思い入れのより強い」感じがある。一方「郷土」は、「より一般的で広い範囲」を指し、「ふるさと」よりは客観的にとらえている感じを醸す。

以上のことから、多様な個性をもつ学習者の集団が、学校という場所で学ぶ教材の呼称としては、より「個人的」で「懐かしむ」気分を醸す「ふるさと教材」より、「一般的」で「今、そこに住む人々」の気持ちを代表する「郷土教材」のほうが適切であると判断する。もちろん「ふるさと教材」という呼称も、その使用を妨げるわけではないが、その場合には、「ふるさと」という語に込められた「個人的思い入れの程度」に注意する必要がある⁽³⁾。

次に「郷土教材」と「地域教材」とを比べてみる。

国語科教育関係辞典で、「郷土教材」(「ふるさと教材」も)は管

表1 戦後中学校国語教科書に掲載された「奈良」を題材とする教材

| 教科書会社 | 教科書番号 | 年号 | 年版 | 学年 | 頁 | 教材名 | 著者 | 出典 | ジャンル | |
|--------|-------|-------|----|----|-----|-------------|------------|--------------|---------------|---------|
| 日本書籍 | 923 | 昭和 | 26 | 3 | 26 | 法隆寺の建築 | 久野建 | 法隆寺の話 | A a A c | |
| | 936 | 昭和 | 27 | 3 | 26 | 法隆寺の建築 | 久野建 | 法隆寺の話 | A a A c | |
| | 9034 | 昭和 | 44 | 3 | 12 | 塔 | 亀井勝一郎 | 大和古寺風物誌 | B b | |
| 東京書籍 | 8-867 | 昭和 | 32 | 2 | 56 | 若葉の西の京 | 鈴木進 | 国宝ものがたり | B c | |
| | A-807 | 昭和 | 35 | 2 | 50 | 若葉の西の京 | 鈴木進 | 国宝ものがたり | B c | |
| | 8014 | 昭和 | 37 | 2 | 80 | 若葉の西の京 | 鈴木進 | 国宝ものがたり | B c | |
| | 8025 | 昭和 | 41 | 2 | 24 | 若葉の西の京 | 鈴木進 | 国宝ものがたり | B c | |
| | 9031 | 昭和 | 44 | 3 | 12 | 塔のいのち | 亀井勝一郎 | 古典美への旅 | B b | |
| | 904 | 昭和 | 47 | 3 | 12 | 塔のいのち | 亀井勝一郎 | 古典美への旅 | B b | |
| | 907 | 昭和 | 50 | 3 | 12 | 塔のいのち | 亀井勝一郎 | 古典美への旅 | B b | |
| | 814 | 昭和 | 53 | 2 | 234 | 大和の塔 | 瀬戸内晴美 | 山河漂泊 | B b | |
| | 9017 | 昭和 | 37 | 3 | 195 | 大和路にて | 堀達雄 | (大和路・信濃路) | B c | |
| | 9012 | 昭和 | 37 | 3 | 245 | 西の京 | 鈴木進 | (国宝ものがたり) | B c | |
| 大阪書籍 | 9922 | 昭和 | 29 | 3 | 46 | 法隆寺 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c | |
| | 9954 | 昭和 | 31 | 3 | 46 | 法隆寺 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c | |
| 実教出版 | 9922 | 昭和 | 29 | 3 | 46 | 法隆寺 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c | |
| | 9954 | 昭和 | 31 | 3 | 46 | 法隆寺 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c | |
| 開隆堂出版 | A-706 | 昭和 | 34 | 1 | 85 | 餅り牛 | 生徒作品 | 綴方風土記 | G e | |
| 学校図書 | 927 | 昭和 | 26 | 3 | 106 | 法隆寺 | 編集委員会 | 書き下ろし | C a | |
| | 938 | 昭和 | 27 | 3 | 131 | 法隆寺 | (編集委員会) | (書き下ろし) | C a | |
| 二葉 | 980 | 昭和 | 28 | 3 | 11 | 法隆寺 | 井上政次 | 大和古寺 | B a | |
| | 9907 | 昭和 | 29 | 3 | 119 | 大和の古塔 | 亀井勝一郎 | 大和古寺風物誌 | B a | |
| | A-805 | 昭和 | 35 | 2 | 236 | 法隆寺の秋 | 春雁 | 春雁 | E b | |
| | 9002 | 昭和 | 37 | 3 | 6 | 奈良の春 | 阪本越郎 | 中学生のための現代詩鑑賞 | E a | |
| | 9002 | 昭和 | 37 | 3 | 9 | 詩の解説 | 吉田精一 | 書き下ろし | E a | |
| | 9022 | 昭和 | 41 | 3 | 6 | 奈良の春 | 阪本越郎 | 中学生のための現代詩鑑賞 | E a | |
| | 9022 | 昭和 | 41 | 3 | 76 | 精神の古墳 | 亀井勝一郎 | 私の人生観 | B e | |
| | 9028 | 昭和 | 44 | 3 | 12 | 「奈良の春」鑑賞 | 吉田精一 | 書き下ろし | E a | |
| | 9028 | 昭和 | 44 | 3 | 64 | 精神の古墳 | 亀井勝一郎 | 私の人生観 | B e | |
| | 801 | 昭和 | 47 | 2 | 196 | 精神の古墳 | 亀井勝一郎 | 私の人生観 | B e | |
| | 808 | 昭和 | 50 | 2 | 26 | 高松塚古墳の発掘 | 新聞記事 | 私 | F d | |
| | 808 | 昭和 | 50 | 2 | 196 | 精神の古墳 | 亀井勝一郎 | 私の人生観 | B e | |
| | 秀英出版 | 9-946 | 昭和 | 30 | 3 | 202 | 奈良見学 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c |
| | | 9-960 | 昭和 | 31 | 3 | 202 | 奈良見学 | 北川統雄 | 関西旅行 | A a A c |
| | 三省堂出版 | 862 | 昭和 | 27 | 2 | 116 | 奈良 | 島村抱月 | 奈良 | A a A c |
| 教育出版 | 9-981 | 昭和 | 32 | 3 | 276 | 大和の古塔 | 亀井勝一郎 | 大和古寺風物誌 | B b | |
| | 724 | 平成 | 24 | 1 | 8 | 文学の旅 | 京都・奈良紀行 | | H a | |
| 愛育社 | 9011 | 昭和 | 37 | 3 | 259 | 思惟の像 | 亀井勝一郎 | 大和古寺風物誌 | B b | |
| | 716 | 昭和 | 53 | 1 | 231 | 地震でも塔は倒れない | 山本学治 | 森のめぐみ〜木と日本人 | C b | |
| 東京修文館 | 9-926 | 昭和 | 30 | 3 | 81 | 初夏の奈良 | 荻原井泉水 | 観音巡礼 | A a A c | |
| | 997 | 昭和 | 28 | 3 | 57 | 奈良から京都へ | 関野克 | 日本の建築 | A a A c | |
| 北隆教育書籍 | 970 | 昭和 | 27 | 3 | 12 | 中宮寺の観音 | 和辻哲郎 | 古寺巡礼 | B c | |
| 中央書局 | 987 | 昭和 | 28 | 3 | 12 | 中宮寺の観音 | 和辻哲郎 | 古寺巡礼 | B c | |
| 光村図書出版 | 955 | 昭和 | 27 | 3 | 74 | 奈良三日 | (石森延男) | | A a A c | |
| | 9932 | 昭和 | 30 | 3 | 74 | 奈良三日 | (石森延男) | | A a A c | |
| | 805 | 昭和 | 56 | 2 | 208 | 法隆寺を支えた木 | 小原二郎 | 法隆寺を支えた木 | C b | |
| | 810 | 昭和 | 59 | 2 | 198 | 法隆寺を支えた木 | 小原二郎 | 法隆寺を支えた木 | C b | |
| | 815 | 昭和 | 62 | 2 | 269 | 法隆寺を支えた木 | 小原二郎 | 法隆寺を支えた木 | C b | |
| | 820 | 平成 | 2 | 2 | 269 | 法隆寺を支えた木 | 小原二郎 | 法隆寺を支えた木 | C b | |
| | 830 | 平成 | 18 | 2 | 146 | 五重塔はなぜ倒れないか | 上田篤 | 五重塔はなぜ倒れないか | D d | |
| | 826 | 平成 | 24 | 2 | 81 | 五重塔はなぜ倒れないか | 上田篤 | 五重塔はなぜ倒れないか | D d | |
| | 日本書院 | A-905 | 昭和 | 34 | 3 | 182 | 大和の旅 | 佐々木信綱 | 新月・豊旗雲、春雁 | E a |
| | | A-905 | 昭和 | 34 | 3 | 186 | たまむしのずしの物語 | 平塚武二 | 日本児童文学全集8 話話編 | D d |

※注1 () で示したのは、他教材からの推測。

※注2 「ジャンル」欄のアルファベット大文字は「文章様式」を、小文字は「題材・内容」を表す。具体的には本文の三の分類を参照されたい。

見の限り見付けることができず、「地域教材」が次の辞典に立項されている(辞典AとCの比較は稿末表4参照)。

A 桑原正夫(二〇〇一)「地域教材」、日本国語教育学会編『国語教育辞典』二七一ページ、朝倉書店

B 村上呂里(二〇一一)「地域教材による国語学習」、日本国語教育学会編『国語教育総合事典』七二二ページ、朝倉書店

C 村上呂里(二〇一五)「地域教材」、高木まさき他編『国語科重要用語辞典』五三ページ、明治図書

このうち、辞典Cでは「地域教材」の意義を考える視点として、

① 地域への誇りを育てること。

② 地域に根ざした思考と、地域の文化をふまえたものの見方を身に付けさせること。

の重要性を指摘している。その根拠となっている府川源一郎(二〇〇五)において、

(前略) 私たちは直接に「地域の

子ども」を対象として教育活動を営んでいる。(中略)その教育が子どもたちに郷土で育つていく喜びと自負とを育てているか。また、地域に根ざした思考と、地域の文化を踏まえたものの見方を、身につけることができているか。それが問題である。

と奇しくも、「子どもたちに郷土で育つていく喜びと自負」(傍線引用者)と述べた(一六三ページ)ように、前述の指摘①②は、「今、自分が生活している」という感情を重視した用語である。したがって、生活場所との関係性が薄く、客観的な用語としての「地域教材」よりも、「郷土教材」のほうが、より適切であると判断する。もちろん、辞典Cが

今日、「地域」Ⅱ「郷土」という図式は急速に崩壊しつつある。

地域の風土・歴史に根ざした伝統的な言語文化の継承・発展とともに「土の人」と「風の人」が出会い、交わった足跡を刻む地域教材開発にも視野を広げ、多文化共生を展望することが今日の課題となる。

と指摘する(五三ページ)ように、例えば、その地域に住む学習者が、必ずしもその地域を「郷土」と認識しているわけではないし、他地域の者がその地域をどのように見ているかを知ること、学習者に多文化共生の視点を提供するが、それゆえ、学習者はまずは自分の住む「郷土」について、指摘①②の視点から学習する必要がある。「奈良」という郷土に具体化してみれば、「奈良」のもつ歴史性・文化性に誇りをもたせ、現代の学習者がそれをど

う考え、どう捉えるか、また、歴史性・文化性の継承・発展と現代の生活との関連をどう捉えるかなど、奈良という土地がもつ独自性を、奈良に住む(生活する)者の視点から学習すべきである。そのためには、やはり「郷土教材」のほうが、用語としては適切である。

以上を整理すると、語自体に備わる「客観性」やイメージとしての「範囲」などから、「ふるさと八郷土八地域」という図式が想定され、そこに生活する学習者の多様性(「ふるさと」という用語に含まれる個人的な思い入れの強弱)と学習者の主観性(生活の事実が存在するという思い入れの強弱)に鑑みて、バランスのとれる「郷土教材」と呼称することとする。

もちろん、学術用語としては、より客観性の強い用語である「地域教材」が使用されることに對して異論はない。

さて、「郷土教材」の内容としては、次が考えられる。

① 郷土の事柄(土地そのもの、建造物や事物、郷土の人々の人事など)を扱った紀行や随想、評論などの教材

② 郷土を舞台にした物語・小説等の教材

は、筆者・作者の郷土在住もしくは郷土訪問は問わず、描かれた内容に焦点を当てた分類であり、さらに、

③ 郷土出身者または、郷土出身者ではないが郷土在住者もしくは郷土訪問者が、郷土について書いたもの

となると、筆者・作者の出身・居住・訪問も条件に加味される。実際は、筆者・作者が郷土出身者、または郷土在住者もしくは

郷土訪問者でなければ、①②のような内容を書くことは不可能に近いので、③に示した筆者・作者が、①②の内容を書いたものと概念付けてよいであろう。

なお、内容は問わず、「郷土出身者」の筆者・作者の作品(教材)も「郷土教材」と呼べないことはないが、本稿では扱わない。

三 戦後中学校国語教科書所載の「奈良」を扱う教材

表1に示した戦後の中学校国語教科書所載の「奈良」に関する教材は、現在確認できた範囲で、のべ五十一編、異なり教材数で三十一編である。この三十一編を「文章様式」「主たる題材・内容」「文章中の主たる場所」から分類すると、次のようになる。

1 文章様式による分類

- A 紀行文・見学記……………七編
 - B 随筆・随想……………十一編
 - C 説明文……………四編
 - D 物語……………一編
 - E 詩・短歌及び鑑賞文……………五編
 - F 報道文……………一編
 - G 生徒作文……………一編
 - H 図解資料……………一編
- 2 主たる題材・内容による分類

表2 文章様式と題材・内容との関係

| | (注) () 内は再掲 | | | | |
|-------------|--------------|-----|------|-------|-------|
| | a 土地や建造物 | b 塔 | c 仏像 | d 工芸品 | e その他 |
| A 紀行文・見学記 | 7 | | (7) | | |
| B 随筆・随想 | 1 | 4 | 5 | | 1 |
| C 説明文 | 1 | 3 | | | |
| D 物語 | | | | 1 | |
| E 詩・短歌及び解説文 | | 5 | | | |
| F 報道文 | | | | | 1 |
| G 生徒作文 | | | | | 1 |
| H 図解資料 | 1 | | | | |
| | 15 | 7 | 5(7) | 1 | 3 |

a 土地や(塔以外の)建造物 ……十五編

b 塔……………七編

c 仏像……………五編(＋aの十五編のうち七編)

d 工芸品……………一編

e その他……………三編

これらの内容は、執筆の基本的な姿勢として「奈良賛美」であり、奈良在住者が感じている課題や困難点には触れない。

これらを組み合わせてみると、表2のとおりである。

「紀行文・見学記」は、当然のことながら「土地や建造物」の紹介やそこに蔵する「仏像」が扱われる。「随筆・随想」は、その内容や対象を「仏像」に特化したのが多く、また、「塔」について述べるのが多いのは特筆すべきであろう。「工芸品」では、法隆寺の「玉虫厨子」、「その他」では、「古墳」を扱うものも見られた。

これらを概観するに、奈良のイメー

ジとして取り上げられる題材や内容としては、「土地や建造物（主として寺社）」「仏像」「塔」が主なものである。

3 文章中の主たる場所

取り上げられる奈良県内の地域を見ると、「法隆寺を中心とする斑鳩」「東大寺周辺・西の京を中心とする奈良市内」が主であり、「飛鳥」「當麻」も散見されるが、偏りがあると言わざるを得ない。その理由は、いくつか考えられるが、書き手のほとんどは県外出身者であり、旅行で奈良を訪れた者が多く、一部の一時的在住者も含めて、その旅行先や在住地が斑鳩や奈良市内に偏っているということであろう。

四 中学生を対象とする郷土教材の先行開発例

中学校国語科学習指導における奈良に関する郷土教材の開発でまとまったものに、奈良市教育委員会・奈良市中学校国語科研究部会（一九五八）『中学生 ふるさと奈良』がある。これは、当時奈良市教育委員会指導主事であった植西耕一氏の尽力によるものである。その内容は、表3のとおりである。

本書の編集方針は、「あとがき」に次のように示されている（一〇六ページ）。

(1) 「奈良」の範囲は、法隆寺方面まで含むが、現在の奈良市地域を中心とする。

(2) 様式論、考証論などは避け、もっぱら中学生諸君の心情に直通するような資料を選ぶ。

(3) 学年性を考え、「読んで」と「出かけて」の両形態に共に生かされるものにする。

(4) 三主題（引用者注―後述）に含め得ないものは自由な読み物資料としてできるだけ入れれる。

(5) 簡単な傍注を添える。

また、本書の使い方については、次のとおりである（二〇四ページ）。

(1) 「ふるさと学習」第一部は「主として読み物学習」の際の資料、第二部は「主として現地学習」の際のハンドブックとしての活用ができる。

(2) 「主として読み物学習」に活用する場合、各学年の主題として次の三つを示している。

① 一年……詩の国へ自然・風土への親しみを

② 二年……みほとけの像へ古美術への開眼を

③ 三年……古都新生へ文化都市市民としての批判力を

(3) 右記の各主題ごとに、次の学習過程を示している。

① 一年……資料群あるいは選択資料を自由読みする。↓主として奈良の自然情景を探索するコースを考える。↓日時と探訪コースをきめ、各自のみつめた点も考えておく。↓学級別に楽しくコースをめぐる。メモをとる。↓印象記を書く。（遠地の知人に送る手紙形式などがおもしろい。）↓発表会

表3 『中学生 ふると奈良』の教材一覧

| 教材（※は戦後中学校教科書掲載） | 筆者・作者 | 在住 | 出典 | 主題 | 現地 |
|-----------------------------|-------|----|-------------|----|-------|
| 詩の国－奈良の四季 | | | | | |
| 1 奈良の春 | 伊ヶ崎明子 | ◎ | 小5教科書 | ① | |
| 2 大和百句より | (投稿者) | ◎ | 朝日新聞奈良版 | ① | |
| 3 初夏の奈良（※愛育社9-926） | 荻原井泉水 | △ | 中1教科書 | ① | |
| 4 奈良三日－第一日（※光村図書955） | 石森延男 | △ | 中3教科書 | ① | A |
| 5 奈良の秋 | 今井鑑三 | ◎ | 小5教科書 | ① | A |
| 6 唐招提寺 | 橋本多佳子 | ◎ | 朝日新聞奈良版 | ① | B |
| 7 ノート | 堀辰雄 | △ | 大和路・信濃路 | ① | A B |
| みほとけの像－奈良の古美術 | | | | | |
| 少年少女結縁八体 | | | | | |
| 8 気高く清らかな好青年・法隆寺夢達観音 | 松本権重 | ◎ | 大和の彫刻美 | ② | C |
| 9 永遠の微笑・中宮寺如意輪観音（※教育出版9011） | 亀井勝一郎 | △ | 大和古寺風物誌 | ② | C |
| 10 少年時代から夢見ていた横顔・中宮寺如意輪観音 | 竹山道雄 | △ | 古都遍歴－奈良 | ② | C |
| 11 純情の少年像・興福寺阿修羅 | 松本権重 | ◎ | 大和の彫刻美 | ② | A |
| 12 この少女のどこに・興福寺阿修羅 | 貝塚茂樹 | △ | 奈良の仏像 | ② | A |
| 13 限りない平和な美しさ・三月堂月光菩薩 | 藤波隆之 | △ | 奈良の仏像 | ② | A |
| 14 温かではげしい・戒壇院広目天 | 堀辰雄 | △ | 大和路・信濃路 | ② | A |
| 15 超人間的な香氣・薬師寺薬師如来 | 和辻哲郎 | △ | 古寺巡礼 | ② | B |
| 16 天平の深淵を語る・三月堂不空羂索観音 | 亀井勝一郎 | △ | 大和古寺風物誌 | ② | A |
| 17 造形の近代感覚・法隆寺百済観音 | 松本権重 | ◎ | 大和の彫刻美 | ② | A |
| 18 自由詩一不空羂索観音 | 新川登紀子 | ◎ | ？ | ② | A C |
| 19 読書感想文－微笑について | 島村直子 | ？ | 読書感想文 | ② | A C |
| 20 奈良三日－第二日（※光村図書955） | 石森延男 | △ | 中3教科書 | ② | C |
| 21 昔の人の誠実さ | 寺尾勇 | ◎ | 奈良散歩 | ①② | |
| 西の京 | | | | | |
| 22 塔について | 亀井勝一郎 | △ | 大和古寺風物誌 | ①② | |
| 23 奈良三日－第三日（※光村図書955） | 石森延男 | △ | 中3教科書 | ①② | B |
| 24 はるかな道 | 田中保雄 | △ | 小5教科書 | ① | B |
| 25 黒松抄 | 北原白秋 | △ | 黒松 | ② | B |
| 古都新生－奈良のありかた | | | | | |
| 26 奈良 | 志賀直哉 | ○ | 早春 | ③ | |
| 27 奈良を亡ぼすものら | 前川佐美雄 | ◎ | 新潮 | ③ | |
| 28 国のまほろば | 竹山道雄 | △ | 古都遍歴－奈良 | ③ | |
| 奈良秀歌集 | | | | | |
| 29 大和の旅 | 佐々木信綱 | △ | 中3教科書 | ① | B |
| 30 南京新唄抄 他 | 会津八一 | △ | 鹿鳴集・山光集 | ①② | A B C |
| 31 宵宮の燈籠 他 | 木下利玄 | △ | 木下利玄全集－歌集篇① | ② | A |
| 32 東大寺伎楽面 | 吉井勇 | △ | 形影抄 | ② | A |
| 33 田原西陵 他 | 土屋文明 | △ | 少安集 | ① | |
| 34 月ヶ瀬行 | 中村憲吉 | △ | 中村憲吉歌集 | ① | |

※注1 「在住」欄の記号は、本書の筆者解説により、奈良に在住者は◎、一時的に在住者は○、一時的訪問者は△とした。

※注2 「主題」欄の記号は、本文の四にあるように、①詩の国（自然・風土への親しみを）②みほとけの像（古美術への関心を）③古都新生（文化都市市民としての批判力を）を示している。

※注3 「現地」欄の記号は、本文の四にあるように、A奈良市東部、B奈良市西部、C法隆寺方面を示している。

② 一年……仏像の紹介順に写真とを開く。文集を作る。
 照応しながら読む。同種のさまざまな写真を持ち寄って仏像写真展の一コーナーが設けられているのもよい。↓文章中の深めたい点、あきらかにしたい点をたしかめる。↓たずねたい一、二体をきめ、学級別あるいはグループ別に出かける。↓印象を作文や詩に書く。もつともころをとらえた仏像へ告白、敬慕の気持ちをこぼす。↓印象を話し合ったり、書いたものを発表し合ったりする。
 ③ 三年……奈良の長所、短所について討議する。↓理想的な奈良市のあり方について考える。↓各資料の論点について読みとる。↓各資料に共通している考えかたをとらえる。また、ちがっている点を検討する。↓この土地に住み続ける上での戒めと工夫を話し合う。↓美しいふるさととするためのい

ろいろな要望をまとめて、関係方面へ出す。

(4) 「主として現地学習」に活用する場合、各学年に次のようなコースを想定し、関係資料を示している。

- A 一年……奈良市東部(興福寺・博物館↓三月堂↓戒壇院)
- B 二年……奈良市西部(唐招提寺↓薬師寺)
- C 三年……法隆寺方面(中宮寺↓法隆寺)

本書の特徴は、この「本書の編集方針」「本書の使い方」のとおりであるが、戦後中学校国語教科書(表1)と比較すると、さらに次の点が指摘できる。

(1) 題材の多様性……題材として取り上げた土地や建造物、仏像に多様性が見られる。例えば、仏像では、戦後中学校国語教科書教材と出典を同じくする教材14で「戒壇院広目天」を、教材16で「三月堂不空羂索観音」を取り上げていて、戦後中学校国語教科書教材には見られない。また、教材15の「薬師寺薬師如来」は戦後中学校国語教科書教材にも記述があるが、その描写方法は全く異なるものである。文章として「読み」にやや抵抗のある資料でも、実際に見ることができる(現地で確かめることができる)という利点を活用した選択は、今後の郷土教材開発に示唆を与えている。

(2) 書き手の多様性……ここにいう「多様性」とは、一つは現住地、一つは職業や立場のことである。前者は、表3の「在住」欄に示したように、書き手が奈良市内在住者(◎)十名、一時的な奈良市内在住者(○)一名、旅行者(△)二十二名、

不明(?)一名であることである。戦後中学校国語教科書では、奈良市内(奈良県内)在住者が皆無である。一方、職業や立場にも、高名な文筆家にまじって、小学生や中学生もいる。奈良出身者・在住者の、郷土に対する視点は、郷土教材開発の重要な観点である。

(3) ジャンル・内容の多様性……取り上げた文章は、随想のみでなく、論説風のものもあり、また、内容的にも奈良を賞賛するのみでなく、批判する内容もある。戦後中学校国語教科書では、そのような内容は皆無である。教科書の性格上無理からぬことであるが、奈良の現実を知り、その解決を考える学習も学習者にとっては、重要な学習である。

五 教材開発の試み

奈良を題材にした教材となりうる素材は、さかのぼれば記紀万葉から現代まで豊かに存在するが、本稿では主として明治以降の近現代作品に絞って提案することとする。

(1) 教材開発のための基礎資料
「奈良」に関する資料は多く存在するが、次の資料は教材開発の際に有益である。

① 植西耕一(一九八九)『文学探究 奈良大和路』奈良新聞社……前述の『中学生 ふるさと奈良』編集の中心であつ

た著者が、取材対象を奈良県全域に広げ、実際に著者自身の現地踏破に基づいて分析、論評を加えたもの。奈良県内（京都南部も含む）の十六の地域に深く関わる記紀万葉から近現代に及ぶあらゆるジャンルの文学作品が紹介されている。

② 前登志夫監修（一九八八）『歴史と名作 奈良紀行』主婦の友社……奈良県吉野に生まれ、在住する監修者が、奈良県内の有名古寺や旧跡について、それにつつまる紀行文や印象記を紹介する。奈良県内を十二の地域に分けている。巻末に作家・作品索引があるのも便利である。

③ 奈良県史編集委員会・黒沢幸三編（一九八四）『奈良県史第九巻 文学―風土と文学―』名著出版……奈良時代から近代まで、編年体によって奈良に関わる文学を論述する。編者の黒沢をして、「一地域をとおしての全日本文学史」（六ページ）と言わしめるほどの本格的な資料である。

④ 帝塚山短期大学日本文芸研究室編（一九八八）『奈良と文学 古代から現代まで』和泉書院……③と同じく編年体により、日本文学全体の中で奈良と文学を捉えることを指向している。特に、近現代に詳しく、また、奈良生まれの作家上司小剣も紹介するのは珍しい。

⑤ 會津八一他三十三名（一九八七）『日本随筆紀行第一八巻 奈良 まほろばの国を尋ねて』作品社……①④と異なり、作品全体をそのまま掲載して、解説は加えていない。した

がって、教材開発の際の本文確認には、極めて有用性が高い。巻末のブックガイドも充実している。

⑥ 河野仁昭編（一九九四）『ふるさと文学館 第三五巻【奈良】』ぎょうせい……⑤と同様、作品をそのまま掲載している。本文確認、教材作成に有用性が高い。巻末の「作家紹介」「作品解説」も役に立つ。

⑦ 浦西和彦・浅田隆・太田登編（一九八九）『奈良近代文学事典』和泉書院……近代・現代における奈良に関わる作者とあらゆるジャンルの作品を解説したもの。郷土教材開発のための座右の書とでも言うべき力作である。

⑧ 嘉瀬井整夫（一九九八）『奈良大和路文学散歩』鳥影社……近代だけでなく現代の文学作品も積極的に紹介しているので、親しめる書である。

(2) 教材開発のための視点

① 取り上げる事柄・内容

戦後中学校国語教科書では、前述のように、寺社などの建造物、古墳、仏像、塔などが多かったが、次のような内容や事柄も教材としての価値をもつ。

ア 民話・伝説・昔話など……全国のどの都道府県にもこの類はあるが、奈良県も同様である。奈良県国語教育研究協議会（二〇一六）では、生駒市に伝わる昔話「鬼取山」「おくりおおかみ」を教材化した。また、葛城市民話編集委員会（二〇〇八）では、葛城市内に残る昔話や伝

説を集め、テキスト化しているので、すぐに教材として使える。伝説探索には丸山顕徳編(二〇一〇)が役に立つ。

イ 行事・芸能・祭りなど……奈良には、古くから続く伝統的な類が多い。前述(1)⑤の資料には、「大和の春の行事(樋口清之)」「お水取り(入江泰吉)」「山焼(宮元常一)」「大和五条の鬼走り(北條秀司)」など、奈良の行事に取材した随筆が掲載されている。

ウ 奈良の課題など……浅田隆(一九八四)は前述(1)③の資料で、「そこ」(引用者注……読者が自己の日常生活から見出し難い夢やロマンを、多様な形で安直に提供する場としての風土―奈良―をえがいた作品群のこと)に描かれる奈良とは、奈良県民にとつての生活の現実としての奈良ではなく、情緒としての奈良、浪漫の媒体としての奈良、端的には『思い入れの奈良』と呼び得るところのものである。(六〇二ページ)と指摘している。例えば「景観問題」は観光都市にとつて永遠の課題である。奈良に住んでいるからこそ捉えることのできる課題を考えさせることも郷土教材の役目である。

② 取り上げる文種

ア 短詩型文学(短歌・俳句など)……会津八一以外にも森鷗外の「奈良五十首」があるし、与謝野晶子の短歌にも大和は詠まれている。

イ 説明文、論説・評論文など……現代の奈良が抱える課題に対し、説明や論評は多い。

③ 取り上げる地域―奈良・斑鳩以外に―

ア 飛鳥地域
イ 吉野地域
ウ 桜井・宇陀地域
エ 葛城地域

(3) 教材開発の事例

① 教材「かすがの―鑑賞・会津八一―」
本教材は会津八一の歌集「南京新唱」一五二首から、一首を選定し、奈良市中心部、西の京、斑鳩地域の順に並べたものである。選定した短歌は次のとおりである。

- ・春日野(かすがが野に……、かすがのゝ……)
- ・猿澤池(わぎもこが……)
- ・高畑(たび人の……)
- ・新薬師寺金堂(たび人に……)
- ・香薬師(みほとけの……、ちかづきて……)
- ・東大寺(おほらかに……)
- ・奈良阪(ならさかの……)
- ・海龍王寺(しぐれのあめ……)
- ・法華寺懐古(ふちはらの……)
- ・秋篠寺(あきしぬの……)
- ・唐招提寺(おほてらの……)
- ・薬師寺(水煙の……)
- ・夢殿観音に(あめつちに……)

・法輪寺（くわんおんの……）

会津八一の短歌は、歌碑としても残され、全国に一九基あるうちの一一基が奈良県内にある。したがって、教室での学習だけではなく、現地での学習も可能である。筆者の場合、「奈良めぐり」という行事で、現地で歌碑を模写するとともに、その解釈・鑑賞を一枚のレポートにする課題を課した。

② 教材「ふるさとを見つめる―奈良 現在・過去そして未来―」⁽⁶⁾

本教材は、国語科総合単元学習のために開発したものである。次の二観点から、複数の資料について読んで味わったり調べたりする学習を行う。

ア 奈良という土地や風土が、過去においてどのように捉えられてきたかを学ぶ。―奈良のことを「知る」学習

イ 奈良という土地や風土が抱える現在の問題、それをどのように解決すべきかという未来の問題を学ぶ。―奈良のことを「考える」学習

アの学習資料として、志賀直哉「奈良」、薄田泣菫「奈良」、野上弥生子「奈良」、荻原井泉水「初夏の奈良」、今井鑑三「奈良の秋」の随筆五編を用いる。イは、共通資料として「奈良の景観に関する懇談会の討論の記録」を用いて、問題意識を喚起し、各自設定のテーマに沿って資料を探索する。テーマは次の六つであるが、すべて「今」の問題と関連させる。

① 「仏像」② 「古建築」―文化財保護との関連

③ 「町並み・都市景観」④ 「道・自然」⑤ 「地形」
―開発や日常生活との関連

⑥ 「伝統行事」―人々の暮らしとの関連

最終的には「奈良という土地・風土にどんな意見を持ち、どんな夢や願いを抱いているか」という意見文を書いて、学習を終える。

学習者の反応としては、奈良という土地に対する発見や問題意識の向上、随筆というジャンルの読みへの親しみなど肯定的に捉える一方で、資料の内容と生活実感との乖離、資料不足等が指摘されている。

これら二教材の実践では、学習者の学習意欲がいつも以上に高かったことを付記しておく。

注

(1) 「東書文庫」の検索画面の「作品名」にいくつかの土地名を入力した結果、東京が七十六件、奈良が三十四件、京都が三十件、北海道が十件となった。本文にも述べたように、この数字はあくまでも参考ということになろう。

(2) 初めに「東書文庫」の検索画面の「作品名」にキーワードを入力して検索を行う。次に、その作品（教材）の掲載教科書の所在を（公財）教科書研究センター附属図書館、国立教育政策研究所

教育図書館、東書文庫の各検索画面で検索し、確認する。所在が確認できたら、上記三図書館のいずれかで現物を見る。後者二図書館の検索画面においても、作品教材名による検索が可能になると利便性が増す。

(3) 筆者は、現在富山県に在任している。富山県教育委員会作成になる『高校生ふるさと文学モデル教材指導資料』作成の任に当たったことがある。富山県内の高校生が学習するのであるから、「ふるさと文学」でももちろんいいが、奈良県出身の筆者としては、「郷土文学」のほうがまだしも受け入れやすい感覚を抱いたことがある。「郷土文学」ならば、今居住する富山県の文学であり、筆者にとって興味・関心は高い。

(4) その意味で、奈良に在住する学習者にとって、奈良を描いた教材群は少なくとも「郷土教材」であり、ときには思い入れの強い「ふるさと教材」であり、決して「地域教材」ではあり得ない。「地域教材」と呼称するのは、例えば、筆者が奈良でも富山でもない地域を題材とする教材を学術的に研究する場合がふさわしいと考えている。

(5) 実践の詳細は『奈良教育大学教育学部附属中学校研究集録』第十二集（一九九一）を参照。

文献

- 葛城市民話編集委員会（二〇〇八）『葛城のむかしばなし』葛城市立図書館

- 奈良県国語教育研究協議会（二〇一六）『伝統的な言語文化』授業の研究と実践』

- 府川源一郎（二〇〇五）『地域言語文化の発見と創造』科学的「読み」の授業研究会編『国語科授業の改革5 国語科 小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』学文社

- 丸山顕徳編（二〇一〇）『奈良伝説探訪』三弥井書店

表4 辞典Aと辞典Cにおける項目「地域教材」の比較

| 定義 | 意義 | 学習活動 | 単元構成 | 教材開発 |
|--|---|--|---|---|
| <p>辞典A</p> <p>地域素材を、学習成立の可能性に着目して教材化したもの。完成された言語文化財のほかに、地域に伝承されている民話、伝説、郷土で生まれた文芸、民芸、方言、遺蹟、神社仏閣、地域開発の諸情報など。また、生きている人材―語り部、郷土の偉人・恩人にかかわった人、地域文化を担って活躍している人など。</p> | <p>国語科は各教科のなかでも教科書への依存度が高く、いまだ教科書教材中心の学習を克服していない。主体的な学習者の育成、生きる力啓培のためにも、国語科の指導は、学習者の言語生活に着目しつつ、言語能力の育成を目指して進められていくべきである。</p> | <p>学習者は地域素材に直接かわわり、調べ、地域の人びとにインタビュするなどで、学習は常に現実的でありアルである。学習の様相はフィールドワーク的な色彩が濃くなり、体験的となる。</p> | <p>学習目標に照らした「教材化」と、学習過程の周到な計画が不可欠である。地域教材が多様なだけに、時に「学習の手引き」など、学習へのていねいな誘いも必要であろう。</p> | <p>地域素材が教材となりうるためには、従前の教科書研究的な「完成言語作品を解釈し、発展させ、深化拡充させる教材研究」のみならず、学習者の実態を把握し、ふんだんにある地域素材を「教材」として活用しうるかどうかを等「教材化研究」が必要である。地域素材をある目標のもと、教科としての価値を問いつつ開発していく。</p> |
| <p>辞典C</p> <p>地域を足場として人々が紡ぎ出してきた地域の習俗、歴史、生活文化から素材を見出し、それを教材にまで高めたものをいう。言語文化教材にとどまらず、地域の豊富な人材や特色ある（場）（歌碑など）も地域教材となる。</p> | <p>・白石壽文が提唱する「自律的言語文化生活者」を育てることが、地域教材を活用した国語学習の最終目標となる。 ・自尊感情育成と深く関わる。①地域への誇りを育てる。②「地域に根ざした思考と、地域の文化をふまえたものの見方」を身に付けさせるという二つの視点は、地域教材の意義を考える上で重要である。</p> | <p>様々な言語活動（取材↓地域新聞作成等）を位置付け、地域の生活文化をより豊かなものにする参加型の学習も考えられる。</p> | <p>中洲正堯は国語教育地域学を唱え、その方法として「歳時記的方法」「風土記的方法」を不可欠のものとする。国語教育地域学の根底には、「からだの内側に風の言葉を聴く力、感覚」等の「五感生活術」の育成が位置付けられるという。しなやかでやわらかな五感に地域でこそ育まれる。</p> | <p>（富山大学教授）</p> |